城北会千葉支部会誌

第 11 号

平成 26 (2014) 年 11 月

城北会千葉支部

目　次

「小澤幹雄のやわらかクラシック」
——兄小澤征爾が歩んだ音楽の道——
音楽ジャーナリスト　小澤　幹雄(S31)　1

「マンションの水漏れ事故は恐ろしい」
千葉城北会顧問　尾崎　英二(S31)　15

「ロシアの児童音楽教育」
城北会千葉支部長　斉藤　徳浩(S32)　17

「夏の終わりに」
家庭裁判所参与員　佐藤　正弘(S34)　22

「今も彷彿とするダイシェンの漢文」
翻 訳 家　白石　治比古(S41)　24

はじめに

城北会本部では今年４月、会長人事がありました。４年間会長をつとめてこられました小宮山宏氏（元東大総長、現三菱総研理事長、戸山 S38 卒）が退任され、新たに岡村正氏（元東芝社長、前日本商工会議所会頭、戸山 S32 卒）が会長に就任されました。小宮山前会長は、戸山高校のスーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）の指定・継続にご尽力され、また深井奨学財団の公益法人化や校友会の公益財団法人化にお骨折りいただきました。

岡村新会長は「我々四中・戸山の精神は、明治 35(1902)年の府立四中設立時に策定された『生徒心得』にあり、そこにあるのは“極めて高い倫理観”」ととらえており、これこそ我々のＤＮＡであり、今後、何事もここに立ち返って解決していきたいと語っておられます。

さて、その傘下にあります千葉城北会はどうかというと、昨年亡くなられた元支部長斎藤和子氏がお調べになったとおり、千葉城北会は昭和 42(1967)年に城北会の千葉支部として発足し、翌年・昭和 43(1968)年には総会を開いています。詳しくは、これも斎藤和子氏創刊の「城北会千葉支部会誌」第 1 号にあります。そこから数えると今年の総会は第 47 回ということになります。こちらもかなりの歴史のある会になってまいりました。

その千葉城北会の目標は何かといえば、以前にも申したとおり、ただ集まって一杯やるだけでは能がない、頭脳にも栄養を与えようと、毎回、先輩・後輩諸氏から講師をお招きして、それぞれ専門の道の講演をしていただいております。その人選には顧問の尾崎英二氏に毎回ご尽力頂いております。会誌も今年で第 11 号になり、次第に厚みを増してまいりました。

問題は、いかにしてこの路線を若い人たちに引き継いでいくかということになりますが、これは常に悩ましい問題です。皆さまの“母校愛”と“ひと声運動”に頼るしかありません。ぜひご協力をお願いいたします。

長年、千葉城北会の事務局長をつとめてこられた本橋輝明氏(S34)が昨年来、体調をこわし療養中ですので、いまは白石治比古氏(S41)に引き継いでいただいております。会計については長年お願いしている佐藤正弘氏(S34)に引き続きお願いしております。いずれも、千葉城北会にとって要となる重要な役割ですので、お二人には引き続き、今後ともよろしくご協力いただきますようお願いいたします。

平成 26 年 11 月

城北会千葉支部
支部長　斉藤　徳浩

千葉城北会懇親総会記念講演　平成25年11月2日

「小澤幹雄のやわらかクラシック」

――兄小澤征爾が歩んだ音楽の道――

音楽ジャーナリスト**小澤幹雄（S31）**

講師紹介　小澤幹雄さんは、千葉城北会顧問の尾崎英二さん(S31)が戸山高校同期・同クラスだったため、ご紹介をいただきました。私も戸山１年のときに演劇班で１年先輩の小澤さんとご一緒させていただきました。国文学者・野口武彦さん(S31)と当時交代で、演劇班で演出・監督をされていました。今日は当時を懐かしみながら拝聴させていただきます。

支部長　斉藤徳浩(S32)

小澤幹雄氏

きょうは千葉城北会にお招きいただきありがとうございました。僕もあちこちでお話をしていますが、まさか戸山高校の卒業生の皆さんの前でお話するとは、夢にも思っていませんでした。

４年以上続いた「やわらかクラシック」

本日の講演タイトルの「小澤幹雄のやわらかクラシック」というのは、僕が昔、ＦＭ東京でやっていたラジオ番組のタイトルで、毎週１時間、全国ネットでレコードをかけておしゃべりをしていました。はじめは１年も続けばいいと思っていたのが４年も続きました。「曲当てクイズ」などの遊びも入れて肩の凝らない番組にしてやっていたところ、多くのリスナーもつき、長く続いてしまったのです。略して「やわクラ」、私は「やわクラの小澤」と呼ばれるようになりました。実はいまでも当時のリスナーが集まってくれて友の会を作って、楽しく過ごしています。

この番組タイトルは実は僕が考えてつけたもので、それだけに愛着があって、いまでもカルチャースクールやエッセイ集にも使っています。

本日は、僕たち小澤一家が中国から引き揚げて、兄・小澤征爾が音楽家になるまでの歩んだ道と、僕が演劇などで経験したことを少しお話したいと思っています。

中国からの引き揚げ

よく「小澤征爾は恵まれた環境で育って、英才教育を受けて、トントン拍子でデビューした」と言われるようですが、決してそんなことはありません。

そもそも、敗戦直後の昭和20年代には、今とちがって子供がピアノを習ったり、バイオリンを習ったりという時代ではありませんでしたので、征爾が音楽を始めたのはほんとに奇跡というか、幸運の連続だったように思います。

僕の家族は中国からの引き揚げです。ただ、敗戦直後の悲惨な引き揚げではなく、戦争が始まる直前の昭和16年のことでしたので、まだ幸いでした。

それまで我々は北京に住んでいて父の本職は歯科医でしたが、父は本職を放り出して、政治活動といえばカッコいいのですが、中国人や日本人の仲間を集めて民間の政治団体のようなものをつくって、その幹部をやっていました。次第に日本の軍隊が強大になり、父の活動は軍からも睨まれるようになり、命も危ないというので中国を去る決心をしました。

昭和16年春に母と我々男の子４人を先に日本に帰して、父はその年の暮に引き揚げてきました。ですから、家族は一人も欠けることなく、全員無事帰国できました。

戦争が始まる前といってもそれはアメリカとの戦争であって、中国との戦争はすでに始まっていました。ですから、いわば敵地の中で生活していたようなものでした。たとえば母が人力車に乗っていても石をぶつけられたり、家のなかでも中国人の使用人がひそひそ話をしていたのが、母が行くとピタッと止んだりして、母はとても怖がっておりました。それでも家族全員そろって帰れたのですから幸せでした。

引き揚げに際して、母は頑張って三つのものだけはどうしてもといって持ち帰りました。

一つ目は、ホーコーズ（火鍋子）といって、真ん中に煙突のある中華の鍋です。

二つ目は、アコーディオンです。クリスマスのときに父が上の兄たちに買ってあげたもので、高価なものだったようです。

三つ目は、写真のアルバムです。黒い厚紙でできたもので、我が家には10～20冊ありました。

この三つを母はしっかり抱えて、神戸港に降り立ちました。今考えると、この三つがのちのち全部役に立ちました。特にアコーディオンが役に立ちました。

横浜からピアノをリヤカーで

落ち着き先は、立川の柴崎町というところで、日本軍の基地がありましたので毎日米軍機B29 の空襲がありました。死と隣り合わせのそのころ、母は「あなたたち兄弟４人で、コーラスをやりなさい」と言いました。母はクリスチャンで、北京の教会に通って讃美歌をたくさん覚えていたので、口移しで我々にも教えてくれました。僕は「お前は声が低いから下を歌いなさい」といわれて小学生でしたけど、いやいやながら低音部（バス）を歌いました。そのときにアコーディオンが役立ちました。はじめは一番上の兄が弾いていましたが、そのうち征爾に教えたら、とても飲み込みが早くて、上の兄よりうまく弾けるようになりました。

一番上の兄は当時「二中」といっていた府立第二中学（今の都立立川高校）に通っていましたが、その「二中」の音楽室にあったピアノを週に１～２回使わせてもらいました。長兄は征爾を連れて行ってピアノの手ほどきをしました。これがまた征爾の上達が早かったのです。そこで長兄は「征爾は音楽の才能がありそうだから、この際、ピアノを買って本格的にやらせよう」と親に相談しました。すると、父も母も音楽のことはまったくわからないながらも、「よし、それではピアノを買おう」と父が言い出しました。その日の食べ物もない敗戦直後の貧しい時代の話です。

方々探したら、横浜の親戚に使っていないアップライトのピアノがあることがわかりました。交渉したら、「売ってあげてもいい」というのです。「よし、それでは」というので、近くの農家からリヤカーを借りて、父と兄二人の三人で横浜から立川まで３日間かけてピアノを運びました。兄二人といっても、旧制中学生、今の高校生くらいでしたから大変でした。リヤカーにピアノを縄でくくって、南武線沿いの県道を来たのだと思いますが、日が暮れると沿道の農家に「すみませんが明日の朝まで置かせてもらえませんか」といって、ピアノをリヤカーに載せたまま農家の庭先に預かってもらいました。それを二晩もしました。

一番辛かったのは、上り坂よりも下り坂だったそうです。三人の男が必死で引っぱっても、リヤカーはずるずると下がって行くのです。父はその後も、下り坂の夢を何回も見たと言っていました。

芋ばかり食べていた時代に、我が家にピアノがあるなんて稀有な幸せでした。父は太っ腹なのかのん気なのか、お金もないので北京から持ち帰っていた趣味のライカ（ドイツ製の高級カメラ）を処分して、それでも足りないので何でもかき集めて、やっとピアノを買うお金をつくったのです。

何年か前、母がまだ元気だったころ、当時の思い出を僕がまとめて回想記にして出したことがありますが、その時に母に「ピアノの値段はいくらだった？」ときくと、母は「確か３万円だった」と言うので、そのまま書いて出版しました。そうすると、横浜の親戚からさっそくクレームがきて、「そんなにふっかけた覚えはない。3,000 円だった」というのです。それにしても昭和 23～24 年ごろの 3,000 円は大金でした。

その 3,000 円のお陰で我が家にピアノが着いて、リヤカーから玄関にピアノを降ろして、

征爾がド、ミ、ソと弾いてみたら、それがものすごくきれいな音で、征爾は「あの音は忘れられない。あのときピアノを買ってもらえなかったらオレは音楽家にはなれなかっただろう」と言っておりました。それから征爾は朝から晩まで、ずーっと弾いておりました。今のレベルから考えればあのとき小学校４年生でしたから、ピアノを始めるには遅かったのです。

僕が覚えているのは、柴崎小学校の学芸会で、５年生になっていた征爾がベートーベンの「エリーゼのために」を弾いたことで、これがいわば征爾の音楽デビュー（？）だったのです。

父の意向で田舎暮らし

僕たちは男ばかり４人兄弟で、征爾が３番目、僕が末っ子です。３人の兄たちは小さいときから音楽が好きでした。

戦後の立川は米軍基地も出来て街にはアメリカ兵があふれ、治安の悪い街になっていました。父は「もう戦争も負けたのだから、田舎へ行って百姓でもやろう」と言い出して、小田急線とＪＲ御殿場線が交差する新松田に近い田んぼばかりの村に引っ越して、家族みんなで百姓をすることにしました。征爾と僕は田んぼ道を 30 分も歩いて村の小学校に通いました。

次兄は県立小田原高校に通いました。兄は合唱団に入りましたが男子校で、隣の小田原城内女子高校という県立校と仲良く混声合唱団をつくっていました。

長兄は、小田高とは何の関係もないのに、その混声合唱団の常任指揮者を頼まれて、長いことやっておりました。当時小学生の征爾は、ピアノが弾けるというのでピアノ伴奏にかりだされておりました。その合唱団の発表会には僕も母に連れられて、小田原の公会堂に行った覚えがあります。当時の我が家は合唱仲間でワイワイとにぎやかでした。

兄征爾が中学に進学するときに小田急沿線の学校を探すと、玉川学園と成城学園がありました。どちらもいい学校でしたが、母は成城学園の方を選びました。

成城学園から戸山へ

僕は皆さんのように向学心に燃えて戸山に入ったわけではありません。もっと現実的な理由で戸山に入りました。

中学まで僕も成城学園で、兄征爾と一緒に通学していました。成城学園といえば幼稚園から大学まである私立一貫校で、征爾と僕は学園生活を大いに楽しんでおりました。

ところが名門私立だけあって授業料が高いのです。学校の経理課の壁には「右の者授業料滞納につき速やかに納入すべし。小澤征爾、小澤幹雄」と大きな字でいつも貼り出されて、恥ずかしい思いをしました。

成城は大好きでしたが、我が家は貧乏でしたので、僕は高校は月謝の安い公立校にしようと思っていました。そのころ２年上の征爾と同級生の優秀な方が戸山高校へ行ったと聞き、担任の先生に「戸山を受けたい」と申し出たところ、「お前には無理だ」と言われました。そう言われるとムラムラと反抗心がわいてきて、ドロナワ式ですが懸命に勉強しました。幸

い合格してほっとしたところ、もう一つ難問がありました。成城学園の授業料を卒業式までに全納しないと卒業証書がもらえないのです。確か 7,000 円くらい滞納していました。そんなお金は払えませんので悩んでおりました。すると「お前には無理だ」とおっしゃった担任の松本先生に職員室に呼ばれました。「授業料は私が立て替えておく」とおっしゃり、さらに先生は「いつでもいいから」「こんなこと気にするな」とまでおっしゃってくれました。僕は感極まって涙をこらえ、このことは一生忘れまいと決意しました。

話は飛びますが、「サイトウキネン・フェスティバル」を毎年開いている長野県松本市の地方紙の連載コラムに、恩師に授業料を立て替えてもらったことなどを書いたことがありました。後にそのコラムがエッセイ集として一冊の本にまとめられました。僕はその本を、心をこめて松本先生に一冊お送りしました。すると松本先生は、「私はこのことを今まで誰にも話したことはなかった。『気にするな』といったことも覚えていない」とびっくりしておっしゃるのです。僕は悪いことをしてしまったかと思って「本にしてしまって赦してください」と申し上げると、先生は何と 20 冊も買ってくださり、方々に配ってくれたのです。恩師というものはありがたいものです。当時、先生は 20 代だったと思いますが、今では 80 代になってお元気で、クラス会にも出ていらっしゃいます。

経済的な理由で戸山に入った僕でしたが、今つくづく戸山に行ってよかったと思っています。いい先生といい友達と出会い、たいして頭のよくない僕でもいい環境と優秀な仲間にもまれて学力もついたような気がします。

ボストン交響楽団と「レッドソックス」

さて、兄・征爾の話にもどりますが、征爾はボストン交響楽団の音楽監督を約 30 年やっておりました。征爾は野球が大好きで、ボストンに住んでいたころ、コンサートホールのすぐ近くにフェンウェイパークという大リーグの野球場がありまして、コンサートが終わって駆け付けると、６回から７回あたりからレッドソックスの試合が見られたそうです。

ボストン・レッドソックスとオーケストラは親交があって、たとえば春の開幕試合には兄が始球式をやったり、オーケストラのメンバーが集まって国歌を演奏したりということがありました。兄はアメリカ中に 30 チームあるメジャーリーグの球場のどこにでも入れるフリーパスをもらっていました。兄はそれが自慢でみなに見せて歩いていました。

先日、テレビを見ていたら、ワールドシリーズのゲーム前に、レッドソックスの田澤純一投手と上原浩治投手を征爾が激励している場面が映っていました。

ボストンの人からみれば、「オザワ」と「タザワ」は似ているのでしょう。「お前はタザワの父親か？」といわれたと笑っていました。

今年(2013)のレッドソックスの優勝を、地元ではどんなにか喜んでいることと思います。

成城学園でピアノとラグビー

征爾がいよいよ田舎の小学校を卒業して、どこの中学に入れようかというときに、小田急

沿線で通える学校を探しました。先程、お話したように、玉川学園と成城学園がありました。家から近いのは玉川学園でしたが、母が成城学園を選びました。通学に２時間半もかかるので、暗いうちに家を出て行きました。

成城学園は自由な校風で、音楽も、スポーツも盛んな学校でしたので、それがとてもよかったと思います。

昔から合唱の盛んな成城学園には、旧制成城高校ＯＢの男声合唱団「コーロ・カステロ」があって、征爾はそこに最年少で入れてもらいました。

僕が成城中学の１年生に入ったころ、征爾は学校中に呼びかけて、中学生だけの合唱団を新しくつくりました。そこで征爾は初めて「指揮」を体験したのです。ピアノもやっていましたので、音楽三昧の毎日でした。

ところが、征爾はスポーツも大好きで、成城学園はラグビーがとても強く、後に新日鉄釜石で有名になった松尾雄治さんの伯父で勝吾さんが征爾のクラスにいて、征爾はその人に誘われてラグビー部に入り、夢中になってしまいました。しかし誰が考えても、ピアノとラグビーが両立するはずがありません。それでも、征爾は何とか両立させようと懸命でした。

とにかく、夕方までラグビーの猛練習をして、ろくにシャワーも浴びずに、世田谷区奥沢の豊増昇先生のレッスンに駆けつけました。豊増先生といえば、当時日本のピアノ界の第一人者で、バッハの連続全曲演奏や、ベートーベンの連続演奏などで有名でした。父の友人の紹介による弟子入りでした。豊増先生の前でピアノを弾こうとしたら、指のあいだからドロがポロリと白い鍵盤の上に落ちとこともありました。先生はそれを黙ってハンカチで拭いてくれたそうです。レッスンが終わって立ち上がると、ピアノの白い椅子カバーにお尻のあとがついていたというのです。

ピアノとラグビーに明け暮れた生活も、ついに両立ができなくなる日がやってきました。ある日のこと、ラグビーの試合で指を踏まれて骨折してしまったのです。鼻からも血が出るほどの大けがでした。豊増先生も大変残念がって「音楽をやめてしまうのか。小澤くん、指揮という道もあるよ」とおっしゃったそうです。征爾はピアノのことしか考えていなかったので、先生から「指揮」という言葉が出るなど思いもよらなかったそうです。

斎藤秀雄先生との出会い

当時、オーケストラが演奏できるホールといったら日比谷公会堂しかなく、そこで日本交響楽団（現在のＮＨＫ交響楽団）の演奏会があり、征爾は生れてはじめてオーケストラの生演奏を聞きに行きました。演目はベートーベンのピアノ協奏曲第５番「皇帝」でした。その日はピアノの独奏者がピアノを弾きながら指揮をしたのです。これを「弾き振り」といいます。ナチスの迫害をのがれて日本に亡命したユダヤ人で、世界的なピアニスト、レオニード・クロイツァーでした。これを見た征爾は家に帰ってきて、母に「僕は指揮を勉強したい。指揮者になりたい」と打ち明けました。

母は「指揮だったら、うちの親戚に斎藤秀雄という偉い先生がいるよ」と教えてくれまし

た。母の祖父と斎藤先生の祖母が兄妹、つまり、斎藤先生と私の母は「はとこ（またいとこ）」でした。斎藤先生のご両親に僕の母は娘時代にとても可愛がられたというのです。なお、斎藤先生のお父さんは斎藤秀三郎といって、ロングセラーになった「斎藤英和中辞典」（日英社・岩波書店）をつくった英語学者です。

征爾はすぐ行動に移す性格ですから、さっそく千代田区麹町の斎藤先生の大邸宅を訪ねました。

「親戚の者ですけど、指揮を教えてください」

斎藤先生は見たこともない子供が「親戚です」といって訪ねてきたのでびっくりして、「こういうときは、普通、親がついてくるものだ」と言ったそうです。

それでも斎藤先生はいろいろ話を聞いてくれて、

「いま新しい音楽学校をつくる準備をしている。来年できるから、それまで待ちなさい」と言ってくれました。それが桐朋学園音楽科だったのです。

征爾はとりあえず成城学園の高校に進学して、翌年、出来たばかりの桐朋学園音楽科に第１期生として入学しました。

桐朋学園というのは、元々は東京教育大学（現・筑波大学）の付属校で、調布市仙川にありました。桐朋学園女子高校の一部に音楽科ができ、音楽科だけは男女共学になりました。当時は「男を入れるなんてけがらわしい」という名門校の一部には反対もあったようですが、なんとか認可がおりました。音楽科の第１期生はほとんどが女子で、男子は４人しかいませんでした。その４人はその後、Ｎ響のコンサートマスターになった人などいずれも第一線で活躍しました。

斎藤秀雄先生の個人レッスンの様子は、いまや伝説にもなっているほどきびしいものでした。麹町の自宅に一人一人呼んで、一対一で徹底的に教え込むのです。女生徒にも手加減をしません。前の生徒が泣きべそをかいて出てくるのを見て、次の生徒が入っていきます。征爾たち指揮のレッスンだけは、生徒を２～３人でやりました。

征爾のレッスンの相棒で兄弟子は山本直純さんでした。彼は芸大の指揮科でしたが、二人一緒にレッスンを受けました。二人に向かって斎藤先生は怒るとメガネは投げつける、楽譜は投げつける、指揮棒は飛んでくるというように、ものすごいきびしさでした。

山本直純さんと征爾はあまりの剣幕に窓から裸足で逃げ出したこともあり、先生の奥さんがあとから二人の靴を持って追いかけてきたという話が残っています。

当時、我が家は川崎に移り住んで遠くなりましたが、征爾は家に着いても怒られたショック（？）が収まらず、玄関で靴を履いたままぐったりしていたこともありました。オーケストラのスコア（総譜）は電話帳のように分厚いので、それを投げつけられるとバラバラになって、それをかき集めて家に帰ってから１ページ１ページセロテープで貼っていくのですから大変です。僕も見るに見かねていつも手伝いました。それでも征爾は辞めずに先生についていきました。

斎藤先生は桐朋学園をつくっても、自分で校長にはなりませんでした。校長は他の人に譲

って、自分は学校中の生徒一人一人を徹底的に教え込みました。「出来の悪い子ほど教えがいがある。ピラミッドの底辺を上げるんだ」とおっしゃっていたそうです。ですから、斎藤先生に教わった人はみな一流の音楽家になっています。外国のオーケストラに入ったり、ソリストになったり、とにかく落ちこぼれを一人もつくらなかった偉大な教育者であったと僕は思います。

征爾は桐朋学園の一期生として最初の卒業生でしたが、その卒業直前の職員会議で、斎藤先生は「小澤にはまだ教えることがあるから卒業させられない」とおっしゃったそうです。単位も足りなかったのでしょう。指揮科は一人しかいなかったので、徹底して仕込んでやろうというつもりだったのかもしれません。当時の斎藤先生はワンマンでしたから、職員会議でも「先生がそうおっしゃるなら」と征爾は留年することになりました。

ところが、学校の事務局がそのことを本人に伝えるのを忘れたのかどうか、本人はそんなこととはつゆ知らずに意気揚々と卒業式に出て行きました。ところが自分だけ名前を呼ばれないのではじめて落第を知ったのです。のん気な学校ですね。新しい学校で、初めて卒業生を送り出したのだから、そういうこともあったのでしょう。一番哀れだったのはおふくろで、母は謝恩会の役員をやっていましたので「今日は恥をかかされたよ」と家に帰ってから大笑いしていました。母ものん気でした。

留年した征爾は助手として残り、斎藤先生が指導する学生オーケストラの楽譜を用意したり、譜面立てを用意したり、椅子を用意したりという雑用を無給でやらされていました。同級生がみな海外に留学するなかで、自分だけ取り残されたという焦りもあったと思います。

ブザンソンの指揮者コンクールへ

当時、フランス政府が募集している１年に一人だけの音楽留学生を受け入れる「給付留学生」制度があって征爾は応募したところ、最後の二人に残ったものの、最終審査でフランス語の成績が悪くて落とされました。どうしてもあきらめきれない征爾は、それからあちらこちらに掛け合って、いまや伝説的にいわれるほどの冒険を決意したのです。

まず、お金がないので貨物船に乗せてもらおうと考え、三井船舶（現・商船三井）に掛け合って、横浜からマルセイユまで、ただで乗せてもらうことになりました。しかしマルセイユからパリまで足がない。そうだ、スクーターがいい。そこで国内のスクーターメーカーにあたりましたが、すべてダメ。最後に当時人気のあったラビットスクーターをつくっている富士重工業を紹介され、新品のスクーターを一台提供してもらいました。

後にそのころのことを「ボクの音楽武者修行」という本にして出したところ、ベストセラーになりました。そうすると「わざと冒険旅行のつもりだったんだろう」というような人もいましたがそんなことはありません。要するに飛行機に乗るお金がなかったのです。今でこそ格安運賃の航空券もありますが、当時はとんでもない高値で、貨物船にスクーターを乗せて、本人は留学したい一心で出かけたのです。

やっとパリに着いて、コンセルバトワールというパリ国立音楽院に行くと、「ブザンソン

国際指揮者コンクール」というポスターが貼ってありました。「こんなコンクールがあるんだ。よし、腕試しに受けてみよう」と思ったのですが、もたもたしているうちに締切り日が過ぎてしまいました。それでもあきらめきれずに、何とか特別に受けさせてもらえないかと日本大使館に駆け込んで頼んでみましたが、門前払いでまったく受け付けてくれませんでした。汚ないジーパンにヘルメットをかぶった若者を、乞食を追い払うようにされたのだと思います。それでもあきらめ切れずに、こんどはアメリカ大使館に頼みこみました。すると、文化部の受付の女性がとてもいい人で、ブザンソンまで電話をかけて「いまここに、日本人の若い指揮者がいるのだけれど、何とか受け付けてやってくれないか」と懸命に頼んでくれました。お陰で締切りが過ぎていたのに、特別に受け付けてもらうことができました。

さあ、それから猛勉強して、ドイツとの国境に近いブザンソンまで汽車に乗って駆けつけました。そこで征爾は国際指揮者コンクールに出場出来たばかりではなく、なんと優勝してしまったのです。本人も大喜びです。賞金ももらいました。受賞記念にフランスのオーケストラも２～３回振らせてもらいました。

井上靖先生との出会い

しかし日が経つにつれて、お金も底をつき、仕事もこなくなり、だんだん心細くなってきて「日本に帰って地方のオーケストラにでも就職口を探そうかと思って落ち込んでいると、たまたまローマオリンピックの取材でパリに来ていた作家の井上靖先生に、毎日新聞のパリ支局長の紹介でお会いすることになりました。

食事しながら征爾が仕事がないと愚痴をこぼすと、井上先生は大変にお怒りになって、「そんな弱気なことでどうするんだ。小説家というのは、いくら書いても翻訳されなければ外国人に読んでもらえない。音楽は演奏すれば世界中の人がわかってくれるではないか。君が羨ましい。もっとヨーロッパで頑張れ」と励ましてくれました。

カラヤンとの出会い、ニューヨークフィル、そして日本公演

そんな時、たまたまカラヤンが弟子を募集しているという話があって、さっそく応募したところ、なんと採用になりました。

カラヤンは面白い人で、自分の弟子を選ぶオーディションをテレビで中継するのですが、たまたまそれを見ていたニューヨークフィルの指揮者バーンスタインが、ヨーロッパまで来て征爾に会いたいというのです。会ったら「ニューヨークへ来ないか。副指揮者のポストをお前にやる」と言ったのです。そんなことで、征爾はニューヨークに渡ることになりました。

副指揮者といっても、バーンスタインが元気なときはまったく振る機会がなく、病気したときくらいしか振らせてもらえません。しかし一緒にアメリカ各地を回ったりして、大変いい勉強になりました。

さらにラッキーなことに、征爾が副指揮者になって半年後に、ニューヨークフィルが初の来日公演をすることになりました。ニューヨークフィルの楽員とバーンスタインと征爾を乗

せた飛行機が羽田に到着し、最初にタラップを降りてきたのがバーンスタインと征爾でした。我々は出迎えのゲートで、コーラスで出迎えました。思い返せば、征爾が貨物船に乗ってパリに行ってからちょうど２年後のことで、征爾はこうしていわば「故郷に錦を飾った」のです。

サイトウキネン・フェスティバルを毎年開催

ご存じのように、長野県松本市で毎年「サイトウキネン・フェスティバル」が開かれています。これは斎藤先生が亡くなって10年目に、斎藤先生の教え子たちが世界中から集まって「斎藤秀雄メモリアルコンサート」という同窓会のようにやったのが始まりです。世界中で活躍している演奏家たちが、この日だけは都合をつけて集まったのです。そうしたら素晴らしい演奏だったので、「一回だけではもったいない。またやろう」と征爾が呼びかけて、毎年やることになり、今も続いています。

松本で始める前に、実はヨーロッパで毎年夏集まって、２週間ほど練習をして、そのあとヨーロッパ各地を演奏旅行して解散するという、１年間でたった２週間しか存在しない「幻のオーケストラ」が存在しました。カラヤンがその評判を聞きつけて「こんな素晴らしいオーケストラを聞いたことがない」といって、初めて「ザルツブルグ音楽祭」という世界最高レベルの音楽祭に招んでくれました。それまで日本のオーケストラは一度も招かれたことがなかったのです。カラヤンのお陰でヨーロッパで評価を高めて、こんどはそれを日本の地方都市に本拠地をおいて音楽祭をやろうという話しになりました。どこでやるかとあちこち候補があがりましたが、最後に決まったのが松本でした。松本で始めてから今年(2013)で22年目になります。

最初は松本文化会館という一つの会場でオーケストラもオペラもやっていましたが、次第に評価が高まってきて、外国からもお客様がくるようになり、チケットも発売２～３日前からテント村が出現して即日完売というのが例年で、松本市でも市長さんがすごい予算をかけてオペラハウスを建ててくれました。もちろん、このためだけではありませんが、お陰でいまでは、オペラはオペラハウスで、コンサートは文化会館でというように二つの会場でできるようになりました。室内楽もあり、音楽祭はどんどん膨れ上がっております。興味のある方はぜひ聴きにいらしていただけるとありがたく思います。

小澤幹雄の演劇人生

征爾の話ばかりで時間がなくなってしまいました。しゃくだから、僕の話も少し聞いてください。

実は僕は戸山高校で演劇班におりまして、演劇が好きだったので、早大に進学して、学生劇団に入りました。戸山から大隈講堂までは歩いて行ける距離でしたので、高校生のときから早大のいろいろな演劇を見に行きました。その中で「自由舞台」という劇団に入りました。「自由舞台」はレベルの高いいい劇団でした。その劇団に、なんと戸山の演劇班の１年先輩

の伊藤牧子さんがいるではありませんか。ほんとに驚きでした。

その伊藤牧子さんは、私と同期で入った加藤剛くんと結婚しました。その加藤くんはいま大スターになって成城に大邸宅を構えています。

自由舞台を卒業すると、仲間は俳優座などプロの劇団に入っていきました。私もプロの劇団に入りたいと思っていると、菊田一夫先生のやっている東宝の「芸術座」というところが劇団員を募集しているというので、軽い気持ちで受けたら受かってしまいました。ですから、僕は昼間は大学、夜は東宝の舞台に立つという二重生活がしばらく続きました。

菊田先生は斎藤秀雄先生のようにとてもきびしく、舞台稽古で怒鳴ったり、役を降ろされたりが日常茶飯事でしたが、とてもいい先生でした。菊田先生は小さい頃大阪で丁稚小僧をして小学校も出ていない苦労された人でしたが、エノケンやロッパの台本を書いたり、「君の名は」などのヒット作を書いたりした人で、私はそのような立派な先生の薫陶を受けました。東宝というのは、それこそミュージカルもやれば、歌舞伎もやれば、現代劇もやるという商業演劇会社ですから、いろいろな舞台に立たされました。森繁久弥さんとか、三木のり平さんとか、森光子さんと共演させていただきました。森光子さんの「放浪記」では、初演と再演まで出ていました。

ミュージカルもブロードウェイでヒットしたものを東宝もやるようになり、最初にやったのが「王様と私」でした。主役は松本幸四郎さんと越路吹雪さんでした。僕はそのときから越路さんの付き人をやらされました。大スターにはみな付人がいますが、まさか自分が付人をやるとは思ってもみませんでした。付人といっても、お茶を入れたり肩をもんだりというのではなく、そういう人は別にいて、僕の役目は越路さんの稽古相手で、越路さんに「ここはこうやるから見ていて」といわれたり、家に帰ってからセリフを覚える相手役をやったりという、「芝居に関する付人」を長いことやらされました。いまから考えればいい経験だったと思います。越路さんのファンは今でも多いので、越路さんの思い出話をすると１時間でも２時間でも過ぎてしまいます。とてもスケールの大きい、すばらしい方でした。

先日、亡くなられた岩谷時子さんがマネージャーをしていて、越路さんが歌う歌はすべて彼女が作詞しました。「ラストダンスは私に」も、「サントワマミー」も、「愛の賛歌」も、すべて岩谷時子さんがお書きになった歌詞でした。岩谷さんはほんとにすてきな方で、最初、私は岩谷さんの方が好きだったくらいでした。

越路さんと岩谷さんは歌手とマネージャーという関係ではなく、本当に一心同体でした。岩谷さんは、生涯一銭もマネージャー料をもらわなかったという人です。それくらい、二人の関係は息が合っていました。

11月７日が越路吹雪さんの命日です。いつも川崎にお墓参りに行っています。

質疑応答

Q：清水(S25)　N響から外されたという事件がありました。どういうことでしたか。

Ａ：小澤　あれは大事件でした。要するに、当時は桐朋学園などできたばかりで誰も知らない音楽学校で、「芸大を出なければ一流ではない」という雰囲気でした。特にＮ響は芸大出のエリート集団でした。そこへ桐朋学園出の名前も聞いたことのない20代の若造が来たというので、最初から何か起こらなければいいがという状況でした。今で言えば典型的な“いじめ”でした。征爾はなんでもポンポン言ってしまうほうで、オーケストラの練習でも大ベテランを相手に言いたいことを言うものですから「あいつは生意気だ」と“いじめ”にあいました。「練習に５分遅れてきた」とか「どこの振り方がおかしい」とけしかけるのがいて、とうとう「小澤の指揮では演奏できない」とボイコットされたのです。最後はＮ響ではなく、ＮＨＫと対立するようになりました。社会問題になり、新聞の社会面でもでかでかと取り上げられる不幸な事件でした。それでも作家の井上靖さんとか、いろいろな文化人が間に入ってくれて一応収拾はついたのですが、その間に入ってくれた人たちが「小澤征爾の音楽を聴く会」を別のオーケストラで日比谷公会堂で開いてくれました。しかし征爾はその後、何十年もＮ響を振ることはありませんでした。若い人などからは「どうして小澤さんはＮ響を振らないんですか」という人もいましたが、その後、間に立ってくれた人たちがチャリティーコンサートを企画して、やっと実現しました。今から５～６年前のことです。そのとき「小澤、何十年ぶりにＮ響を振る」と報道されたものですから、若い人たちから「え、何かあったんですか？」といわれました。その時はすでにオーケストラのメンバーがみな入れ替わっていて、ボイコット事件を起こした時の団員は一人もいませんでした。

ご存じかもしれませんが、征爾と親しい萩元晴彦さんというテレビプロデューサーが、小澤征爾の「ボクの音楽武者修行」という本をテレビ番組にしてくださいました。一部はドラマ、一部はドキュメンタリーで構成して、３時間番組でした。その番組の中で萩元さんは「ところで小澤さん、Ｎ響事件を、いま、どう思っていますか」と聞きました。私ですら聞かないことを萩元さんはズバリ聞いたのです。すると征爾は何のわだかまりもなく「今まで一回も話したことがないけどさ」といって、しゃべり始めました。「確かに自分も若くて至らない点があったけど、ああいう形で若い芸術家をいじめるのはよくない。私は何とか這い上がったけど、永遠に消されてしまった演奏家もいっぱいいたに違いない。私がよかったのは、マスコミにも袋叩きにあったので『もう、二度と日本では仕事はしない』と心に決め、外国に出て行ったことです。断崖絶壁に立たされた思いで、何としても外国で成功しなければならないと決意しました。石をもって追われるようにしてアメリカに行き、うんと苦労の末、アメリカで一応の仕事ができるようになりました。その意味では事件があってかえってよかった」というようなことを征爾は言っていました。萩元プロデューサーと征爾は仲が良く、心が通じ合っていたので、話したのでしょう。

Ｑ：玉谷(S38)　私はＮＨＫのＯＢで、いま「ラジオ深夜便」というラジオ番組を担当していますが、桐朋学園の関係ではＮ響のコンサートマスターだった徳永二男さんと、ビオラの今井信子さんにインタビューする機会がありました。お二人とも斎藤秀雄先生のきびしさをいっておられました。

ところで、小澤さんは斎藤秀雄先生や菊田一夫先生のようなスパルタ教育というか、今ならパワハラと言われそうな鬼のような先生について、どう思われますか。

A：小澤　斎藤秀雄先生について、征爾をはじめ教え子がみないうのは「こわかったけど、あんないい先生はいなかった。今自分がいるのは先生のお陰」ということです。だからみな一流の演奏家になって、年に一度は世界中から仕事を休んで「サイトウキネン・フェスティバル」に集まってくるのです。こわいといっても別に暴力をふるうわけではありません。音を出す前に「違う！」と言ったそうです。いい音楽家を育てようという一心できびしかったのだと思います。

私は菊田一夫先生にしぼられました。下手な芝居をする役者には「お前なんかやめちまえ」と罵声が飛んできました。稽古中はどなられっぱなしで本当にこわい先生でした。それでも先生を恨んだり、嫌ったりする人は一人もいませんでした。

森光子さんが「放浪記」を演じる前に、菊田先生が自分の大阪で丁稚奉公をしていた少年時代を扱った自伝的作品「がしんたれ」がありました。主人公が上京してサトーハチローさん宅に下宿しているところに売れない詩人仲間がいっぱい集まってくる、その中に林芙美子がいて、それが森光子さんの役でした。私も「草野心平」役で出ていましたが、ほんの端役だった森光子さんを菊田先生は絶賛して、「よし、こんどはお前を主役にした台本を書こう」といって、１年後にできたのが「放浪記」でした。それまでは脇役ばかりでしたので、森さんご本人も台本ができるまで信じられなかったとおっしゃっていました。決して大女優だったから主役をやったのではありません。下積みから実力ではい上がって、「林芙美子」になったのです。

今はすぐ「パワハラ」だと親が怒鳴り込んでくる時代ですから、もうああいうことはできないでしょう。しかし私は、ああいうきびしさは必要だと思っています。

Q：於保(S35)　私は中国へよく行くのですが、確か２～３年前、朝日新聞で小澤征爾さんが日中関係について「国と国との関係はどうあれ、個人的には親しくしている友人がたくさんいる」と書いておられましたが、そのことについて小澤幹雄さんはどう思われますか。

A：小澤　征爾は奉天（今の瀋陽）で生れ、上の兄は長春で生れ、私は大連で生れましたので、中国への愛着は人一倍強く持っています。父も亡くなるまで「もう一度中国に行きたい」と申しておりました。

征爾は父をなんとかして中国へ連れて行こうと計画しましたが、ちょうど文化大革命のときで、それが終わって１年後の1978年に向こうから連絡があって、北京のオーケストラを指揮しました。残念ながらそのときすでに父は他界していて、母が父の遺影を持って、家族全員で行きました。うれしいことに、我々が引き揚げる前に住んでいた北京市内の家がそのまま残っていました。母と兄弟４人で行ってみようということになり、行きました。北京のど真ん中の王府井の近くです。まったくそのまま残っていて、何家族もそこに住んでいました。我々は門だけ見て帰ろうとすると、中から大勢の人たちが出てきたので「実は私たちは戦前ここに住んでいた者です」というと、「あっ、昨日テレビに出ていたシャオツォー（小

澤の中国読み）だ！入れ、入れ！」と大歓迎してくれました。中庭に行くとそこに住んでいる家族が全員出てきました。それ以来、征爾は北京に行くたびにそこに寄り、親戚以上の付き合いをしております。私ももちろん一緒に行きます。

母が亡くなったとき、征爾と私は示し合わせたように、葬儀で遺骨を拾う時にいくつか壺に入れないで、ティッシュにくるんでポケットに入れました。その直後、征爾はオペラを振りに北京に行きました。私もＪＴＢのツアーを引率して北京に行き、二人で昔の我が家に行き、住んでいる人たちに立ち合ってもらって、中庭の花壇に母の骨を埋めました。母の名は「さくら」といいましたが、そこに住んでいるおばさんたちが、名にちなんでその花壇に桜の木を植えてくれました。その桜が年々育ち、毎年みごとな花を咲かせているそうです。

もっとうれしいことは、北京オリンピックで開発が進み、古い家が壊されて新しいビルに建て替えられていきましたので、昔の我が家もこれで終わりかと思っていたら、いろいろな方々が市当局に運動してくれて、その家がなんと永久保存されることになったというのです。記念館になるのかどうかはまだわかりません。とにかく、保存されることは確かなようです。これからも北京に行くたびに寄ってみようと思っています。

「マンションの水漏れ事故は恐ろしい」

前城北会千葉支部長　　尾 崎　英 二

私は長年、建築設計の仕事を続けております。現在は、マンションの大規模修繕工事の設計・監理の仕事が中心です。一方では、社団法人日本建築家協会の建築相談室・弁護士会、欠陥住宅関東ネットで建築相談を担当しています。相談内容は多岐にわたりますが、このところ多いのはマンションの水漏れについての相談です。そこで、その内容を皆さまにもご報告し、ご参考にしていただけたらと思います。

＜事例１＞マンションの管理組合の理事の方からのご相談
「ディスポーザーによる大事故」

渋谷区のタワーマンション（40 階建）で、上階の台所のディスポーザーの操作を間違えて、下階の相談者の住戸に大量の水を落して大損害を与えたのみか、さらにその下の階の２住戸にも被害を与えたという事例がありました。

竣工後わずか１年でのことでしたので、建物を施工したゼネコンに見積をさせました。見積りによると約 2000 万円（これは建築のみで家財は別）という巨額の見積が出ました。これに対して上階の人の入っている保険会社からは 400 万円しか支払えないと言われました。途方に暮れた管理組合理事から、どうしたものかという相談を受けました。私は、これは弁護士と相談しなければならないが、その前に建築士による報告書及び復旧見積書が必要と説明しました。

ディスポーザーとは台所の生ゴミを砕いて熱湯と共に排水管に流す設備です。アメリカの都市型マンションで以前から使用されているもので、細かく砕いたものを熱湯と共に流すものですが、最近、日本でも高級マンションに採用されるようになりました。アメリカの場合はガス、水道と同様に給湯会社より熱湯が供給されますが、日本の場合は熱湯が使われていないので、排水管内部にミキサーによって砕かれた生ゴミが、コレステロールのようにつきやすいので、この事例のような問題が発生します。付着したゴミにより配管の口径が小さくなるので問題がおきるのです。ディスポーザー付きのマンションは余程管理に注意しないと事故が起きやすくなりますので、購入の際には十分検討が必要です。

＜事例２＞オーナーマンションで上階の浴室から下階へ水を落した例

浴室からの漏水で下階が水浸しというオーナーからの連絡を受け、さっそく工務店と一緒

に現場へ行きました。すると、下階の３住戸で水の被害が出ておりました。天井裏に水がまわり下へ落ちる、壁のクロスの内側にも水がまわりふくらんでいる、といった問題が起きていました。

そこでどうしたらいいかということになり、聞いてみると上階の入居者が保険に入っているというので、保険会社に見積書を提出することになりました。天井、床、壁もすべて貼り替える（カビの発生を除去するため）、漏電チェックも必要、これ等も含めて 320 万円の復旧工事費が必要という見積を保険会社に提出しました。保険会社には見積通り認められ、改修工事に入ることになりました。

＜事例３＞上階で洗濯機の水を出しっ放しにして下階へ水を落した例

私の友人のマンションの上階で、洗濯機の水を出しっぱなしにしたために、床上を水いっぱいにした後、下階の住戸に漏水が及び、全室を水浸しにしてしまったのです。

友人から、保険会社が来るので立ち会ってほしいと言われて立ち合いました。私は現場の状況から判断して、保険会社に対して天井、壁、床の貼り替えを要望し、天井を貼り替える際、上階のコンクリートスラブの下側に浸透性の防水をやるように指示しました。

これに対して保険会社側の建築士はその必要はないと言うので、私は、まだ水漏れ後、時間が経過していないので、上階の湿気を下階におろすのを防ぐために必要であると説明しました。するとその保険会社側の建築士はぷいと退席してしまいました。しかしこちらの主張は間違っていないと確信していましたので、保険会社に請求しましたところ、主張がみとめられ、見積どおり改修してもらうことが出来ました。

以上の例からご覧のように、いったん水漏れ事故を起こすと予想外の高額な復旧工事費がかかることになります。やはり保険に入っておかないと大変なことになります。そうしないと、上下で戦争状態となり、金銭解決が長びき、裁判による解決しかなくなってしまうことにもなりかねません。マンションにお住まいの方、充分ご注意を願います。

ロシアの児童音楽教育

城北会千葉支部長　**斉藤　徳浩**

ロシアという国は、優れたスポーツ選手や音楽の演奏家を数多く輩出し、国際舞台で他の国を圧倒しています。その理由・原因はどこにあるのでしょうか。よくいわれるのが、国が力を入れているからということです。確かに専門学校があり、優勝すると多額の報奨金がもらえるということはあるようです。はたしてそれだけでしょうか。問題は素質のある子供をいかに見出し、いかに育てるかという「システム」や「プロセス」にあるのではないでしょうか。

そこに注目してロシア（旧ソ連）の音楽教育、特に初めてピアノに接する児童音楽教育を詳しく調べてこられて、それを日本で実践されたピアノ教育研究家がおられます。たまたま私はその方と縁あって、教則本の翻訳のお手伝いをしたことがありますので、その時感じたことをもとに、日本とロシアの違いにつえて考えてみたいと思います。

公開講座「ソ連の新しいピアノ教育の基礎」

成田稔子さま

年代は少し遡りますが、昭和56年(1981)4月22日、ピアノ教育研究家である成田稔子（としこ）さんは、当時ソヴィエトのピアノ教育の実際を現地で視察してこられ、そのメソードをご自身の教え子たちとともに実践され、成果を日本ショパン協会（安川加寿子会長・当時）の第85回例会で発表されました。公開講座「ソ連の新しいピアノ演奏教育の基礎」と題した発表会がそれでした。当時新宿西口にあった朝日生命ホールで行われた発表会では、成田さんの新しいピアノ教育方法で学んだ子供たちが、実際に演奏してみせ、それまでの日本のピアノ教育とはどう違うのかを聴かせてくれました。客席の参加者の多くは、子供たちがいかに素直に、生き生きと、楽しそうに演奏するかを見せられ、驚き、圧倒され、新鮮さに感動したのではないかと、私も参加させていただき思いました。

児童音楽学校で使われている「ピアノ演奏基礎教本」

成田稔子さんは、チャイコフスキーコンクールやショパンコンクールに毎回招かれ、世界レベルの若き演奏家たちの実力を目の当たりにしてこられました。昭和55年(1980)には、かねがね思っていたソヴィエトの各種音楽学校の授業風景を、2週間かけてつぶさに視察す

る機会を得られました。そのとき、いずれの音楽学校でも共通して使用されていたピアノ基礎教本を見て、「これこそソヴィエトのピアノ教育の真髄だ」と思って成田さんはその教則本を持ち帰られました。

その成田さんと私はたまたまご縁があって、翻訳のお手伝いをすることになりました。成田さんは私が早稲田の露文出身であることを思い出され、その教則本を翻訳してくれないかとおっしゃるのです。そう言われても私のロシア語はすでに錆びついていて戸惑いましたが、同窓の力も借りて何とか翻訳にこぎつけました。それが「<新しいソヴィエト教育システム>ピアノ演奏基礎教本」です。昭和54年(1979)10月に「音楽之友社」から発刊されました。ピアノの先生方が買ってくれたようで、その後増刷されましたが、現在では残念ながら絶版になっているようです。

その「ピアノ演奏基礎教本」は、児童音楽学校（一般の小学校とは区別されている）の１、２年生向けの教則本です。そのまえがき、初めてピアノに接する児童に対する先生方の心得や、手ほどきとなるような解説が書かれていました。これを翻訳していて、私は大変に驚きました。私の娘がピアノ教室で教わっていたような、日本のピアノ教育のプロセスとはまったく違っていたのです。

「芸術性」と「音楽性」

その教則本によると、第一に子供にいきなりピアノに触らせてはいけないというのです。はじめて音楽に接する子供たちにとって大事なのは、音楽の素晴らしさをまず体感させることです。それにはピアノにいきなり触れさせるのではなく、自分の生まれた町や村の民謡（ナロードゥナヤ・ペスニャ）や、童謡などを歌わせるのです。先生はそれを歌ったり、ピアノで弾いて聞かせたりして、その歌の「芸術性」や「音楽性」を子どもたちに感じさせるのです。小さい時こそ「芸術性」や「音楽性」をしっかり感じさせることが極めて重要だというのです。ではその「芸術性」や「音楽性」とはいったい何でしょうか。それは芸術や音楽の「本質」を知ることです。では、その本質とは何でしょうか。それは「感動」することです。音楽の素晴らしさを体感させることです。音楽の素晴らしさに目覚めさせることです。いったん目覚めた子供たちは、生き生きと音楽の勉強に取り組むようになります。途中で投げ出すようなことがなくなります。

鍵盤には白黒があっても音には白黒がない

次に、いま歌ったり聴いたりしたメロディをピアノの鍵盤で拾わせるのです。メロディに合わせようとすると、当然、黒鍵も出てきます。驚いたのは「ピアノには白鍵と黒鍵の色分けがあるが、音には色の区別がない」というのです。言われてみればそのとおりです。ソヴィエトの児童音楽学校では、歌った民謡や童謡を、中指１本で弾かせます（人さし指だと他

の指が握りこぶしになる。中指だと他の指は開いたままになるのでその方がいい)。そうすると、自然に黒鍵も入ってきます。このようにして、最初から黒鍵に対する恐怖心を持たせないようにするのです。さらには同じメロディを１音上げる、あるいは２音下げて弾かせます。当然、黒鍵がまた異なったところに現われます。このようにして、初心者のうちから移調奏法を取り入れて、最初の段階から黒鍵を恐れずにメロディを演奏することに慣れさせるのです。

第１章に入る前の解説にはこう書いてあります。

「ピアノ演奏の最初の段階での基本的なことがらは、学ぶ者に音楽への愛、音の響きやメロディの展開の動きに対して、注意深い態度、音楽的な印象を敏感に感じ取る能力を培うことです」

このあたりが日本の、いきなり指使いなどのテクニックから入るピアノ教育とは大いに異なるところではないでしょうか。

「聴く」「歌う」「弾く」のプロセス

このプロセスを図式にすると、ソヴィエトの児童音楽学校では「聴く」→「歌う」→「弾く」という順序になります。例えば「カッコー、カッコー」といった小さな曲でも、先生の歌を聴いて、豊かに歌うこと、それをピアノで拾うことというプロセスを経て、その理解力、表現力を身につけさせるのです。

日本での一般的なピアノ教育では、楽譜を「見る」→ピアノを「弾く」→その結果を「聴く」という、テクニックとしてのプロセスになります。ソヴィエトの図式と比べてみてください。日本では、いかにテクニックに重点が置かれているかがわかります。音楽を志す者にとって、最初に大事な「芸術性」や「音楽性」という本質的な部分が飛ばされているのではないでしょうか。

伸びる才能はどこまでも伸ばす

１～２年生向けのこの「ピアノ演奏基礎教本」には、面白いことに不協和音の入った曲も選択されています。つまり、音楽に興味をもった子には“何でもあり”なのです。何もこの教則本にとらわれることはないともいっています。伸びる子にはどんどん上級の教材を与えて、興味があったら他の楽譜も弾かせるなど、どこまでも伸ばしてやることです。

もともと音楽でもスポーツでも、才能のある子はどんどん伸ばすという英才教育が基本です。そうすることによって、伸びる子は予想もしなかったような才能のひらめきを見せるのです。そのかわり、限界の見えてきた子は、途中からでも一般校に戻すというのがソヴィエト流の教育です。英才教育とはそういう冷酷な面ももっているものなのです。日本のように「１年生だからここまで」といった限界を設けたり、平均教育をする必要はまったくないのです。

子どののためのピアノ曲集「ピアノコスモス」

成田稔子さんは、ショパン協会の公開講座のあと、さまざまな新聞から執筆依頼があり、新しいピアノ教育法として注目されるようになりました。日本各地で公開講座やレクチュアをされました。その中で成田さんは「子供たちのうちの秘めた音楽性を引っ張り出したい」と言っておられました。そのために新しい教材が欲しいと思い、そのことも併行して実現されたのですぅ。

「ピアノコスモス」という子供たちが発表会などで使える、新しいピアノ曲集を成田稔子さんは松井直子さんとの共著で、昭和53年(1978)５月から10月にかけて３部シリーズとして全音楽譜出版社から出版しました。そこにはヨーロッパをはじめ、アメリカや日本からも、これと思われる子供向けの魅力ある曲を選りすぐって載せられています。それまでは発表会といえば「エリーゼのために」とか「乙女の祈り」が定番でしたが、この「ピアノコスモス」の発刊以来、「おまつり」（Ｃ．グルリット）や「ジプシーの群れ」（Ｆ．ベール）など新しい曲が取り入れられるようになりました。幼い子供たちのピアノ教育の様相が一変したのです。成田さんの編纂された曲集などは15冊に及びます。

成田さんはショパンコンクールで優勝されたブーニンをＮＨＫに協力して日本に招聘されたことでも、皆さんの記憶にあると思います。ブーニンの演奏の力強さ、自由奔放な演奏を聴くと、なるほどと思われた方も多かったに違いありません。ブーニンによって、これまで述べてきたロシアのピアノ教育法が優れた演奏家を育てた典型を見ることができるのではないでしょうか。

成田さんの言いたかったことは、ピアノ教育の最初の段階が極めて大事であり、日本でよくある、ピアノがあまり好きでもないのに、親の勝手で無理やり習わせて、途中で嫌になって投げ出してしまうというような子供をつくるのではなく、子供たちが何をしたいのか、何を感じているのかをよく観察して、テクニックから入るのではなく、「芸術性」「音楽性」から入る、つまり音楽の素晴らしさに感動させることから出発する、音楽が好きになるように子どもたちを仕向けることが最初にやらなければならないことだと言いたかったのではないでしょうか。そうすれば、途中で嫌になってやめてしまうような子はいなくなるのではないでしょうか。このように、日本のピアノにおける児童教育の刷新において、成田さんの果たされた役割は極めて大きかったのではないかと思います。

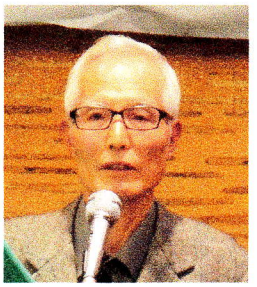
＜余談＞小澤征爾さんがカラヤンと話していたときに「日本にはスバルという４輪駆動車がある。雪道を走るのにはあれは素晴らしいクルマだ。私も愛用している。なに？　知らない？　日本人なのに？」というお話があったそうです。小澤征爾さんの依頼を受けた富士重工業では、小澤征爾さんにレオーネ４ＷＤを１台無償貸与することにしました。ところが、小澤征爾さんはほとんど日本におられません。そこでその４輪駆動車を乗り回したのは、ほとんど弟の小澤幹雄さんだとうかがいました。

私は富士重工業のスバルのビデオを制作しており、たまたまナレーターに、当時アメリカから入って来たテレビ番組「コンバット」のサンダース軍曹の吹き替えをやっていた田中信夫さんに、よくナレーションをお願いしていました。その田中信夫さんは、小澤幹雄さんと落語研究会仲間だったそうで、スバルの４輪駆動車をもっぱら愛用したのは、このお二人だったというお話を、仕事の合間に田中さんからよくうかがいました。

もう一つ、小澤幹雄さんのお話があります。サントリーホールが完成して、柿落としにカラヤンが呼ばれてブラームスの「交響曲第一番」を振る予定になっていました。ところが直前になってカラヤンの体調がよくなく、急遽、小澤征爾さんが代わりに振ることになったとお聞きしています。音楽仲間では略して「ブラワン」といわれているこの曲は小澤幹雄さんも大好きな曲で、戸山高校在学中に新宿のレコードショップの前を友だちと通りがかったとき、この曲の重々しいイントロ部分が聞こえてきて、小澤幹雄さんは金縛りにあったようにその場に立ちつくしてしまいました。友だちがあきれて「先に帰る」と行ってしまったそうです。その「ブラワン」をサントリーホールで柿落としに振ったのは、なんと、小澤征爾さんだったのです。

小澤幹雄さんのご講演にもあったように、そもそも小澤征爾さんの世界的な指揮者として出発した契機の一つに、富士重工業のラビットスクーターとの出会がありましたが、私もその富士重工業に、マーケティングのお仕事を通じてお世話になりました。何か運命的なものを感じざるを得ません。

夏の終わりに



家庭裁判所参与員　**佐藤正弘(S34)**

この夏の異常気象は、甚しい。前線の影響で、各地で集中豪雨が発生し、特にお気の毒なのは、広島のような土砂災害に遭われた方々でした。避難勧告の遅れといった人災もあって大惨事となりました。一日も早い復旧を祈るばかりです。

１年前の夏（平成 25 年７月）には、千葉城北会の前顧問の斎藤和子(S29)さんがこの世を去りました。お元気だったお姿を思うとあまりにも早いご逝去に驚くばかりでした。

斎藤さんが支部長時代に、懸命な努力で現在のような「城北会千葉支部会誌」が発刊されました。平成 16 年(2004)の第１号では、城北会千葉支部がどのようにして誕生したのかご自分で調べられ、その歴史を紹介してくださいました。同年著名な外科医森岡泰彦(S24)先生の講演を実現し、その講演記録を翌年の「会誌」第２号に掲載されました。その後も講演や先輩インタビュウ、投稿原稿などの工夫があって、「会誌」は現在のような一巻の読物として今日に到っています。

斎藤和子さんは、東大医学部看護学科を卒業され、千葉大学教授、岐阜看護大学教授を歴任され、地元なども支援してこれらました。

最後に高崎の看護大学教授として学生を指導してこられましたが、その時に体調を崩されて（平成 24 年）施設に入所されました。

その後の身上監護をなさったのは、弟さんでした。弟さんから、昨夏（平成 25 年）和子さんが亡くなったとの、連絡を頂き、合わせて相続時の相談にあずかりました。

遺言が無く私と苦労した覚えがあります。弟さんの訃報はそのあと間もなくでした。

その前後に、同級生が亡くなった。未だ働き盛りの弁護士、若かりし頃、一緒に登山遭難しかけたり、進む道は異なったが、未熟な私を仕事面でも支え、公私共に兄弟のように支えあったのだが・・・。まだまだ期待される方々で、あった。

この世の無常を禁じえない。

高齢化社会が進展している。男性も平均年齢 80 歳を超えた。

私自身も、すでに古稀を過ぎ、あと２年で、第二の定年（家裁の参与員）を迎える。高齢者の仲間入り。終活期を、どう生きるかを考えなければならない。

遺言を作り、残された家族が争続にならないように。

資産のある方は、相続税改正のある来年以降の相続税対策を検討する必要があります。

最後に参与員をやっていて、気の付く事ですが、認知症は誰でもなります。認知症の方460万人、軽度の方400万人いるそうです。早めの発見と予防が大事だそうです。

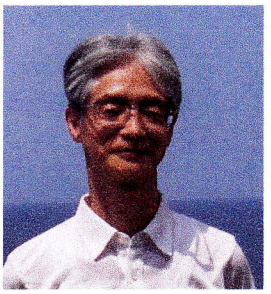
病院と薬に頼るばかりでなく、積極的にアンチエイジングについて学びたいものです。又今大抵の病院に「もの忘れ外来」があります。早期発見に役立つとおもいます。

生活習慣病を予防しながら、人とよく交流し、適度の頭を使い、体も動かす事も大切です。

もし、認知症になったら、成年後見制度の利用をお勧めします。（地域包括支援センターで、アドバイス、家庭裁判所の利用）

三浦雄一郎さんの80歳「加齢への挑戦」とは行きませんが、自分らしく豊かに生きていければ、良いかなと考える昨今です。

今も彷彿とする「ダイシェンの漢文」



翻訳家　白石治比古（S41卒）

最近、中国関連のよくないニュースが多くて、いささかうんざりしている。

チョット前には「不機嫌な中国」とかいう本が出ていたが、確かにここのところ中国は世界に対していささか不機嫌だ。1911 年の辛亥革命以来、百年以上近代化に励んできたにもかかわらず、いまだに経済では新興国レベル、政治では米国に頭を押さえられている。

中国が日本をＧＤＰで抜いたとか、宇宙に中国人を送ったとか、空母も所有しているとか、中国からすれば世界的にそれなりに遇されるべき存在になったと思っているのだが、現実にはちっともそうなっていない。中国から見れば「世界が間違っている！」、世界の考えを正すには実力をもって正すしかないということになってくる。そうなると少し話がややこしくなってくる。

そもそも日本ではその昔、裸同然で山の中でイノシシを追っかけていた時代に、中国は世界最大の大帝国として君臨していた。引き金のついた弓矢や、馬にひかせた戦車や、鉄製農具がすでにあった。とにかく今のアメリカと日本の差なんてまったくお笑い草と言えるくらい、当時の中国と日本の差は大きかった。だからこの中国は（中国の感覚では一万年くらいが一昔なので）、高々数千年位で自らの大中華帝国が消えたとは絶対に思っていないし、思いたくもない。たとえ事実だとしても認めたくない。ここのところをしっかり押さえておかないと日中政治問題はこじれるばかりである。というようなことを今私が言えるのは、まさしく福島正義先生すなわちダイシェンのおかげであると私は思っている。

ダイシェンの夏休みの宿題

ダイシェンとは九州なまりで「大先生」のこと。少しはにかみながら自分のことを「ダイシェンは…」なんて言うので、生意気盛りの高校生にも大人気だった。

そもそも私が大学にいってから第二外国語に中国語を選んだ理由はダイシェンの夏休みの宿題からだった。その夏休みの宿題は、まったくの白文（いっさいのレ点も上下も送り仮名もない、ひたすら漢字を羅列した文）で、どこから手をつけていいのか、思わずうなってしまったものだ。しかたないのでコツコツ文法から独学することにしたのだが、だいたいもって漢文とはなにか、と考えざるを得なかった。自分自身としてはあくまで「古文」の一種だと思っていたが、これではまったく外国語の学習と同じではないか。だったらしっかりと発音から勉強するべきだと考えた。

中国に親近感のある私の両親

思えば、一家でテレビを見ていて京劇の場面に出くわして、台湾生まれのオヤジは「ええもんじゃのう」と広島弁なまりで言い、上海育ちのオフクロは「でもあたしは宦官の感覚がよくわからないのよね」とか返していた。そんな会話の中で、僕は中国語のフランス語風ななめらかさと、漢字のいかついイメージが「くさやのひもの」的コラボレーションとなって、思わず聞きほれてしまった。さらに白文の文法学習の中で頭に来たのは平仄（漢詩で重視されるアクセント）だ。まったく中国語の発音を無視して白文を日本語読みしておきながら、中国語のアクセントに気をつけろとはなんなんだ！これは断固中国語を実際にやるしかないとなった。そうなると漢文は「漢文」ではなくて「中国語の古文」になる。英語のシェークスピアみたいなものだ。“かっこいいじゃん”てなわけで大学では第二外国語で中国語をとり、日中学院にかよい、NOVA で中国語会話を駅前留学し、大連、上海、蘇州、杭州、北京、西安、洛陽と旅した。

旅して少しわかった（？）中国

旅をして何がわかったかというと、日本人は国内にいるままで中国をわかろうとするのはやめたほうがいい、中国については中国人ですらもよくわからない、ということだった。一万年の歴史があったとしても、昨日の中国と明日の中国は同じでないかもしれない。なにかをわかろうとしてわかったところで、それがなんなのだ。

中国で一番面白かったのは、弥勒菩薩（金箔貼の日本で言う布袋さん）と古幣金蟾（銭の束を背中に背負って銭と金塊の山に乗っている三本足のガマガエル）。自由奔放と金銭欲が中国人の本音にあるのではないでしょうかね。

ダイシェンの剣道

ダイシェンは剣道の大家だった。授業中に剣道の話をしてくれたことがあった。
ダイシェンによると「そもそもスキをみせまいとか、打ち込もうとか考えているときは負け」だそうだ。ふらふらになるまで疲れて、何も考えられない状態（つまり無念無想）のときが一番強いのだそうだ。

二年の学園祭のときに、剣道部が演武を見せてくれた。ダイシェンの登場はとても印象的だった。例の口を“へ”の字に結んで茫洋とたたずんでいるだけですごい貫禄だった。このときいっしょに見事な竹刀さばきを見せてくれた剣道部の主将は、なぜか卒業の年に首都高でオートバイ事故で亡くなった。同じころ学園誌の編集長をしていた女子生徒もクモ膜下出血で死亡した。昨日と今日は断絶していると思った。

ダイシェンの国会答弁

ダイシェンは国会に参考人として呼ばれて漢文教育擁護で大弁舌を振るった。相手は左翼

だ。特に国会で漢文教育を軍国主義だと称して排撃する左翼国会議員は大嫌いだった。その左翼に対して保守派の議員がヤジって「そんなに漢文を攻撃するなら、それなりに漢文の素養があるはずだ。四書五経の書名を一つずつ言ってみろ」と言ったとか。相手の左翼議員は言葉に詰まり国会は爆笑の渦になったとか。

ま、この話のおかげで私も四書五経の書名に興味を持ち、儒教の勉強を少ししてみるようになった。中国では人民文化大革命のときは「批林批孔」と孔子批判全盛だったのに、今は孔子学院という名の中国語教育機関が、政府によって全世界に設置されていている。地下の孔子もその変転に目を丸くしていることだろう。

ダイシェンの戦争体験

ダイシェンに戦争のときの話をしてくれと誰か（僕だったかもしれない）が頼んで、いささか「しょもないなぁ」という風な感じで話をしてくれたのを覚えている。

なんでもダイシェンは砲兵で日本の沿岸で米軍の艦船を砲撃したらしい。しかしいかんせん、ダイシェンの「ヤマトダマシイ」をもってしても弾はまったく届かなかったらしい。「まことにむなしか」と言っていた。どんな型式の大砲でどんな種類の軍艦を狙ったのか、具体的にはまったく言わなかった。だからなぜ当たらなかったのかという問題提起もなかった。ここのところが、いまにして思えば実に良くも悪くも中国風ではあった。言いたくなかったのだろう。

国士舘大学教授に

卒業してしばらくしてから新聞にダイシェンの記事が出た。「タクシーに博士論文を置き忘れてしまった、大切なものなので是非見つけたら返してほしい」との話が載っていた。 ダイシェンのガックリ肩を落とした姿が目に浮かんだ。でも一方で博士論文に挑戦していた気力にも驚いた。そのあと、うまく出てきたかどうかは覚えていない。でも国士舘大学の教授となったことは確かだ。

ダイシェンは記録によると戸山高校の学園歌の作詞者として名を残している。戦後の漢文教育廃止に反対して国会で参考人として長々と漢文教育の弁を述べたということも含め誠に戸山高校の背骨を守って獅子奮迅の戦いをした人である。

漢字を学び、漢文を学ぶことはひとえに日本だけのためではない。隣の韓国・朝鮮（ハングク・チョソン）の中世の文学は漢文そのものだし、ベトナムも表記はローマ字だが内容は漢文そのものだ。同じことはタイ語でも言える。つまり日本人は知らず知らずに国際語を勉強しているのだ。だから外国語学習に有利な国民なのだ。この漢文を死守してくれたダイシェンに感謝（ガンシエ）！

城北会千葉支部会誌　第11号

平成26(2014)年11 月発行
発行　城北会千葉支部
支 部 長　斉藤　徳浩（S32）
副支部長　堀口俊一郎（S32）
副支部長　岡田　光正（S35）
顧　　問　尾崎　英二（S31）
事務局　270-0014 松戸市小金きよしヶ丘3-5-2
白石　治比古（S41）
電話　047-348-1263